

ピングラップ島の養子制度

— 家族・親族・婚姻の変容との関わりにおいて —

中谷純江

Adoption in the Change of Family, Kinship, and Marriage:

A Case Study of Pingelap Island

NAKATANI Sumie

鹿児島大学国際連携推進センター

Center for International Planning, Kagoshima University

要旨

オセアニアにおいて養子慣行は広く観察され、多くの人類学研究で議論されてきた (NAKATANI 2013)。ピングラップ島に関する先行研究によれば、相続や婚姻など親族制度は、人口増加とともに進化し、島の限られた土地に多くの人が暮らすことを可能にしてきた (DAMAS 1983, 1994)。例えば、二重相続は所有地が複数個所にちらばる結果につながるが、それがセキュリティの役割を果たしている。どこかの土地が塩水にやられても、別のところに芋類の収穫が期待できるためである。養子慣行も同様に土地の相続と結びついて盛んに行われてきた。本研究では、ピングラップ島の養子慣行に焦点をあて、島の人口減少という近年の状況下で家族や婚姻、親族制度の変容について明らかにするとともに、コミュニティの維持・発展の方向性を考察する。

ミクロネシア連邦ポンペイ州に含まれるピングラップ環礁島は、他のミクロネシアの島々と同様に 1960 年代に急激な人口増加を経験し、その後 80 年代以降は逆に移住による人口減少がおきている。現在、土地所有者の多くは島に居住しておらず、荒れて放棄される土地が増えている。ダマス (DAMAS 1994) がいうように、島が支える人口と親族制度 (相続や婚姻や養子など) が結びついて進化してきたとすれば、現在の過疎化においてこれらのシステムも変化を余儀なくされていると考えられる。

今年度実施したピングラップ島での予備的な聞き取り調査において、養子慣行は 60 年代までごく一般的に、親族間で盛んに行われていたことが明らかになった。養子には、養育を目的とするもの (*naiyapar*) と土地の分与を目的とするもの (*pwekpwek*) の二通りがあるが、近年は特に後者のタイプの養子が見られなくなっている。養子慣行の変化は、主として人口圧の問題や土地相続制度など経済的な要素から説明することが可能であるが、

両親と子供からなる西欧的近代家族の概念が、キリスト教の布教とともにピングラップ社会に浸透していったことも影響していると思われる。今後、ピングラップ社会の親族関係の詳細を調査し、人々の社会的ネットワークの広がり、その機能の実態を明らかにする予定である。養子慣行に焦点をあてながら家族や親族、婚姻制度の変容を見ることを通して、最終的には、島の人口の減少、移動の問題について考察する。

ピングラップ島から外への移住が始まったのは、20世紀初頭のことであり、1960年代にはポンペイ本島のコロニーへの移住が大規模に見られた。ミクロネシアが米国の信託統治領であることから、近年は多くの人々がグアムやサイパンや合衆国本土へと移動している。こうした国境を越える近年の移動は、文化人類学においては、トランスナショナル研究の枠組みで議論されてきた。例えば、近年の移動はグローバルな政治経済構造との関係で説明され、個人や世帯の戦略として、変化への交渉過程として論じられてきた。しかし、移動する本人や移住者を輩出する世帯を研究対象とするだけでは、島に残された非移住者を核とするピングラップの人々、つまり残された側の人々が守っていく「地域社会」や「親族集団」全体にとっての移住の意味を理解することができない。

実際、ピングラップ島にとって、これ以上放棄地がふえると地域社会の暮らしは成り立たなくなる懸念があり、家族や親族の共有資源（家屋、芋類の畑、ココヤシ、パンノキ等）の利用・管理・所有をめぐる問題は、移住者と非移住者の双方にとって懸案の事項となっている。又、移住者の多くは、地理的空間を越えて、土地所有や親族関係、婚姻によるつながりなど様々な関係を維持し続けており、ピングラップ地域社会は島という地理的空間を越えて存在している。

本研究は、移住者も含めた「トランスローカル・ピングラップ・コミュニティ」の人々にとっての移住を考察することを最終目的とする。具体的には、1) 今日のエconomicシステム下で、生存のための資源の多くが島外に依存し、島の人口が減少している中で、家族や親族のシステム、特に土地相続と関わる婚姻や養子慣行がどのように変化しているのかを調査し、新たなEconomicシステムへの家族や婚姻や親族のシステムの対応を明らかにする。2) グローバル化の中で、人の移動や情報伝達が著しく容易になったことで、地理的空間を越えて広がるピングラップの人々のつながり、ネットワークを新たな社会資本として捉え、人々が社会的ネットワークを活用して、島の土地や植物などの自然資源及び、伝統規範や知識や技能など文化資源を含むコミュニティの共有資源をどのように維持していくのか、「トランスローカル・ピングラップ・コミュニティ」の発展の方向性を企図する。

引用文献

- DAMAS, D. 1983. Demography and Kinship as Variables of Adoption in the Carolines. *American Ethnologist*, 10(2): 328-344.
- DAMAS, D. 1994. *Bountiful Island: A Study of Land Tenure on a Micronesian Atoll*, 272 pp., Wilfrid Laurier University Press, Canada.
- NAKATANI, S. 2013. Adoption in the Changes of Family, Kinship, and Marriage: A Comparative View Based on Studies in Micronesia and India. *Occasional Papers (Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands)*, 53: 51-59.